

令和6年度 第2回 北海道立函館美術館協議会会議録

- 1 日 時 令和7年2月27日(木) 10:00~11:15
- 2 会 場 北海道立函館美術館 講堂
- 3 出席委員 三谷会長、鳴海委員、高橋委員、梨木委員、吉田委員、鶴野委員、熊木委員、高村委員
(欠席委員:元木副会長、石岡委員、桜花委員、土生委員)

4 傍聴者 なし

5 議 事

(1) 報告事項

ア 令和6年度事業実施状況について

事務局: 「令和6年度(2024年度)事業の実施状況について」に基づき説明。

委員: 新たにInstagramを立ち上げたとのことなので、これからどんどん投稿が増えていくことを望む。函館美術館が、街の魅力を引き継ぐ重要なファクターになれば、予算もつくと思う。

さらに函館市以外の方々、外国の方々にもどんどん魅力を発信し、PRしていてもらいたい。

委員: 個人的にInstagramは苦手なこともあり、利用から遠のいているが、私の仕事柄、自分の顧客たちにも公式InstagramをPRしていきたいと考えている。

接客業をしている自分の周りには、高齢の方が多く、芸術に興味のある方が大勢いる。

今期の「文字の芸術をめぐる旅展」では、新聞に作品1点1点について、学芸員の説明が丁寧に書き添えられており、その記事から興味を持ち、展覧会へ行ってきたという声も聞いている。

今後もInstagramを皆さんに広めることはもちろんのこと、新聞やラジオ等のPRも続けてもらいたい。

委員: 若年層への情報発信の強化も重要な取組であるが、シニア世代やリタイヤした方々の中で、趣味として芸術に触れたいといった思いを持っている方が多い。

道立美術館では65歳以上は常設展は無料だが、特別展は有料である。

特別展も無料になれば、そういう思いを持っている方々は美術館に足を運ぶようになると思うがどうか。

事務局: 若年層や高齢の方々に限らず、多くの方々に当館を利用してほしいのは、共通認識であるが、制度上、特別展を無料にする取扱いはない。

制度の見直し等が行われる際には、当該意見を反映できないかなど、本庁に提案していきたい。

委員: 前回協議会で、公式Instagramの開設を提案し、先般、フェイスブック経由でInstagramを立ち上げたことを知り、フォローさせていただ

た。自分の娘は高校生だが、SNSの利用するツールとして、今はラインで交流するよりもインスタグラムで交流することが多いと聞いている。

例えば、ラインでは友達登録はせず、繋がりを持っていないが、インスタグラム上でメッセージを送り合っているというように、気軽に幅広く利用できるツールとして使っているため、長期休業中に高校生に向けたイベント情報を発信したり、公式インスタグラムのQRコードを投稿して、それを見てフォローし実際に観覧に来てくれた方に、何か一工夫があれば、もっとフォロワー数が増えると思う。

また、イベントの告知などは、通常投稿ではなく、若者がよくチェックする「ストーリーズ」を活用すれば閲覧数が伸びると思うし、そこから学生の美術館利用の増加に繋がっていくと思う。

会 長： 第1回の協議会で、美術館利用はなかなか敷居が高いという話が上がったが、SNSの活用や展示作品の発信は、権利関係など難しいところが多いと思うが、そのようなものをクリアしながら発信したり、あるいは、音楽とコラボレーションするなど、子供達がもっと気軽に足を運べるよう、少しずつ改善していただきたいと思う。

(2) 協議事項

令和7年度事業の運営計画案について

事務局： 「令和7年度（2025年度）事業の運営計画案について」に基づき説明。

委 員： 令和7年度の事業計画案について、充実した内容であり、大変楽しみにしている。

なお、来年度の貸館について、内容が決まっていれば教えていただきたい。

また、教育普及事業の中で写真をテーマとしたワークショップを計画しているということだが、白黒写真を現像するような予定もあるのか。

事務局： 貸館については、毎年開催している北海道書道展を予定している。

写真のワークショップについては、関係者との調整中につき、まだ事業内容は確定していないが、サイアノタイプというもので、日光を使って印画できるようなものを考えている。

現像という過程はないが、印画紙が光を受けて、画像がじわりと浮き出てくる様子を見ることができ、印画紙の構造も知っていただく機会となれば良いと考えている。具体的には、今後、関係者と調整していく。

委 員： 令和7年度の展覧会の事業計画案を見て、今から楽しみにしている。

アール・ブリュットに関しては、今までは小さいギャラリー等で活動している方々が多い印象があるが、今回、函館美術館が、展覧会を通じて、作品を広めていくことは非常に良い取組だと感じた。

また、後半に開催予定の道南のヴィジョン展（仮称）は、私に限らず、テーマに即して多種多様なジャンルの美術品を見ることが好きだという方々が、周りに大勢おり、期待できる。

私は、深井克美さんの作品がとても好きで、過去に函館美術館で展覧会を

開催されたことを知り、再度開催してほしいと思っていたので、心待ちにしている。

また、写真のワークショップについては、自分の子供達や今の20代は、デジタルではなく、逆にアナログであったり、フィルムカメラに興味を持っている方々が大勢いる。

また、アナログカメラをわざわざ購入して、写真を撮影している方も周囲に大勢いる。

このワークショップでは、カメラの撮り方や面白さを知るきっかけにもなるので、知人などに紹介やPRをしていきたいと思う。

委員： 令和6年度の事業の実施状況報告、令和7年度の事業計画案の取組状況を伺ったが、目的に合わせ、様々な工夫がなされ、年々、活動の幅が広がってきていると思う。

また、協議会委員の意見なども、きちんと吸収して事業に反映するなど、努力の跡が見られた。

このほか、先ほど、他の委員から公式インスタグラムをフォローした方々に、もう一工夫あればとの発言があった。

観覧料無料というのは他館の関係もあり難しいと思うが、例えば、何か特典をつけるなど、フォロワー数を増やす独自の対策などにチャレンジしてみてもどうか。

その結果、あまり効果が得られなければ、止めれば良いし、効果が高ければ、継続していけば良いと思う。

委員： 令和7年度の事業計画案を伺い、どの展覧会も楽しみにしている。

先日、「文字の芸術をめぐる旅展」に訪れた際に、ロビーのパンフレットスタンドに次回展覧会のチラシが置かれ、一緒に来ていた友人と「次回は山下清展だね」「絶対来たいね」と話しながら観覧した。

展示室出口付近にも次回展覧会のポスターを掲示しPRされていた。

一方で、展示室出口から館の正面出入口までの間には、いくつかチラシやパンフレットが置かれていたものの、次回展覧会のチラシは置いておらず、ロビーまでチラシを取りに戻った。

ロビーだけではなく、正面出入口付近にもチラシを設置することで、開催中の展覧会を見終わった後も、次回の展覧会情報に触れることができ、PR効果も高いと思う。

情報提供という観点で考えれば、どの時点で、誰に何を伝えるかというタイミングに適したパンフレットやチラシを設置することで、リピーター対策にも良い影響を与えると思う。

次年度の山下清展にはたくさんの観覧者があると予想しますが、その方々が、春夏秋冬いつでも来館したくなるような、繋がりや導線づくりを望む。

また、インスタグラムについては、私もアカウントを持ち、インスタグラムで情報収集などを行っているが、公式アカウントを持ち、上手に運営している企業はたくさん存在する。

一つ目は、定期的な情報発信で、定休日の情報や開館・閉館時間、開催中の展覧会の会期など、二つ目はフロー情報の発信で、見どころ解説の発信や、来場者の情報、そのほか、おしゃべりコラム的な情報など、定期と不定期が混ざり合って、ミックスされた情報を発信するなど、とても上手い運営をされている企業があるので、そういう良い部分を真似て、函館美術館の公式アカウントも情報発信して行ってほしい。

- 委員： 色々な取組をされており、いつも、柔軟に対応されていると思っている。やはり、来館の内訳を見ると、以前から若い世代が少ない。美術に興味がある方ばかりではなく、私のように普通に生活をしている方も、美術館に足を運んでみようという、芸術・文化の力は非常に大事。あまり良く分からずに美術館に来ても、実際に作品を観覧し、目の当たりにすると感じ取れることはたくさんあると思うので、若い世代の方々に足を運んでもらえるような工夫を継続していただきたい。
- 特に、小中学生であれば、本人だけではなく、その保護者が美術館を訪問しようと思わないと、訪問できないということも考えられるので、様々な取組を進めていく中で、足がかりをつかんでいってほしい。
- また、先ほど、写真のワークショップについて伺ったが、私は、幼少期に学年誌の付録についてきた、日光に当てると風景などが浮かび上がる工程が非常に楽しかった思い出がある。
- 写真のワークショップは、それよりもさらに高度な進化版と思う。
- 夏の長期休業期間にもかかると思うので、子供から大人まで触れられる機会を提供できたら良いと思う。
- 展覧会とワークショップが融合して、充実した体験ができると感じた。